

研究に関する現況調査表

作成要領

研究に関する現況調査表の作成要領等

学部・研究科の研究に関する現況調査表

学部・研究科の研究目的と特徴・・・1

分析項目ごとの水準の判断

分析項目 研究活動の状況・・・・・・・・・・ ー

分析項目 研究成果の状況・・・・・・・・・・ ー

質の向上度の判断・・・・・・・・・・・・・・・・ ー

<現況調査表の構成・様式と記述に当たっての留意点>

1. 現況調査表の構成・様式を、各頁左側に記載している。(太字斜体が記述部分)
2. 原則として、1つの学部・研究科等 当たり6000字以内で記述する。ただし、分析項目、基本的な観点の名称の文字数や本文中に記載する資料・データはそれに含めない。
『学部・研究科等』とは、「教育学部・教育学研究科」、「社会情報学部・社会情報学研究科」、「医学部・医学系研究科」、「工学部・工学研究科」及び「生体調節研究所」を指す。
3. 資料・データは、基本として、「観点に係る状況」の本文との関係が容易に確認できる位置に、本文が読みにくくならないように記載する。その際、資料・データには、その名称や出典を明記する。
4. 資料・データを別添とする必要がある場合は、1つの学部・研究科等当たり6頁以内とする(「学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト」(表)及び「研究業績説明書」(表)を除く。)
5. 資料・データには、必ず番号を付し、本文中で参照を促す際には、資料・データ番号を示す。また、必要な部分のみを抜粋した上で掲載し、参照すべき箇所がどこかを明示する。
6. 同一の資料・データを複数回参照する場合には、1回のみ掲載し、他の分析項目等の説明で参照する箇所では、資料・データ番号及び該当頁を示す。
7. 原則として、日本語は明朝体で全角、英字は明朝体で半角、一桁の数字は明朝体で全角、二桁以上の数字は明朝体で半角を、それぞれ使用する

学部・ 研究科の研究目的と特徴

1

 2

 3

 4

 5

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

<実績報告書作成要領 10 頁より>

研究の水準及び質の向上度の分析は、研究科等が設定している研究目的に照らして行われるので、目的の記載が必要である。ここでいう目的とは、研究科等が研究活動を実施する上での基本方針、方向性、達成しようとする基本的な成果等を指す。

目的の記載に当たっては、以下の点に配慮する必要がある。

- 各学部・研究科等の個性や特色が理解できること
- 中期目標に記載している大学の基本的な目標、あるいは教育研究等の質の向上に関する目標との関連が分かること
- 各学部・研究科等の目的に対する理解を深めるために、踏まえておく必要があると考えられる組織の特徴や特色等についても分かりやすく記述すること

<留意点>

1. 「研究目的と特徴」を確認する。
 - (1) 現在（既存）の研究目的の設定状況（部局が研究活動を実施する上での基本方針、達成しようとする基本的な成果等を踏まえているか等）の確認
 - 部局全体（ 定めていない部局は、作成する。）
 - 学科等毎（ 定めていれば、できるだけ簡略に記述する。）
 - (2) 大学全体の中期目標における基本的目標や教育研究の質の向上に関する目標との関連、位置づけの確認
 - (3) 特徴（構成、経緯等） 特色等の確認
 - (4) 修正、追加の有無の確認
2. 「研究目的と特徴」は、最初から十分に完成させる必要はない。完成は、最終段階（分析終了後）でも構わない。
3. 字数は、1000～1500 字程度が目安となる。学科等の多い部局では収まらない可能性があるが、最初から無理に圧縮する必要はなく 3000 字程度の範囲で記述する。

分析項目ごとの水準の判断

分析項目 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

.....

資料 - A (資料・データの名称、出典等)

資料・データの内容

資料 - B (資料・データの名称、出典等)

資料・データの内容

.....

資料 - C (資料・データの名称、出典等)

資料・データの内容

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) _____

(判断理由)

.....

分析項目ごとの水準の判断

<実績報告書作成要領 10 頁より>

研究の水準は、評価時点（平成 20 年 3 月末）における各研究科等の研究活動及びその成果の状況から判断する。

分析項目の観点（基本的な観点のほかに、各研究科等の目的や状況に照らして独自の観点の設定も可能である。）ごとに分析を行い、その結果を踏まえ、分析項目ごとに各研究科等で想定する関係者（当該研究科等の研究活動やその成果を、直接的、間接的に享受する人々や組織を指す。具体的には、学術面では関係する学界等、社会、経済、文化面では国際社会や地域、特定の産業分野が想定される。）の期待に込んでいるか、という視点で判断する。

研究の水準の分析に当たっては、数量的なデータ等を基に、組織全体の研究活動の状況を判断する項目（分析項目「研究活動の状況」と、組織を代表する優れた研究業績を基に、組織全体の研究成果の状況を判断する項目（分析項目「研究成果の状況」）がある。

なお、観点の分析結果を記述する際には、観点ごとの状況が明確になるよう、根拠となる資料・データを示し、記述する。

観点 研究活動の実施状況

【分析項目 研究活動の状況】

<実績報告書作成要領 30 頁より>

この観点は、研究科等の研究目的に照らして、研究活動が活発に行われているかについて、研究活動の実施状況、研究資金の獲得状況等、研究活動の活性の度合いを示す客観的な数値データを中心に把握する。

ここでいう「研究活動」とは、基礎研究や応用研究に限らず、技術・品種の創出診断・治療法の改善・定着を目指した研究の活動、学術書・実務書・教科書等の出版、海外の学術書・文芸作品等の翻訳や紹介、総合雑誌のジャーナリズム論文の出版、辞書・辞典の編纂や関連データベースの作成、政策形成等に資する調査報告書の作成、実務手法の創出、スポーツ・芸術の創作やパフォーマンス、芸術作品等の修復・発掘・展示等の技術の開発・改良等の、広く教員の創造的活動を指す。

【根拠となると考えられる資料・データの例】

(1) 研究の実施状況

論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況、研究成果による知的財産権の出願・取得状況、共同研究の実施状況、受託研究の実施状況

(2) 研究資金の獲得状況

科学研究費補助金受入状況、競争的外部資金受入状況、共同研究受入状況、受託研究受入状況、寄附金受入状況、寄附講座受入状況

分析項目 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況

(観点に係る状況)

.....

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) _____

(判断理由)

.....

観点 研究成果の状況 [分析項目 研究成果の状況]

<実績報告書作成要領 31 頁より>

この観点は、研究成果の状況について、学術面、社会、経済、文化面の視点から選定した「研究業績説明書」(表)を資料として、研究目的に照らして、関係者の期待に応える成果があがっているかを把握する。

【根拠となる資料・データ】

- 「学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト」(表)
- 「研究業績説明書」(表)

<実績報告書作成要領 10 頁より>

【学部・研究科等を代表する優れた研究業績の選定と提出資料の作成】

平成 16 年 4 月～平成 20 年 3 月の間に公表された研究業績のうち、目的に照らして組織を代表する優れた研究業績(以下で示す判断基準で上位二つの区分(SS 及び S)に該当する研究業績)であると判断する業績を選定する。 1

選定した業績については、「学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト」(表)及び「研究業績説明書」(表)を作成する。 2

- 1 研究業績の選定に当たっては、第三者による評価結果や客観的指標等の根拠資料を基に、優れた研究業績として判断されるものを厳選する。
- 2 選定する研究業績数は、平成 19 年 5 月 1 日に在籍している助教以上の専任教員数の 50%を最大値とする。ただし、その数まで「学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト」(表)に記載することを求めるものではない。

【研究業績の判断基準】

判断は、1)学術面、2)社会、経済、文化面のいずれかの視点で行う。

1)学術面

- SS：当該分野において、卓越した水準にある
- S：当該分野において、優秀な水準にある
- A：当該分野において、良好な水準にある
- B：当該分野において、相応の水準にある
- C：上記の段階に達していない

「相応の水準」とは、当該分野の専門家が判断して標準的な水準にあることを指す。この水準を基準として、上位二つの区分(SS 及び S)を判断する。

2) 社会、経済、文化面

- SS：社会、経済、文化への貢献が卓越している
- S：社会、経済、文化への貢献が優秀である
- A：社会、経済、文化への貢献が良好である
- B：社会、経済、文化への貢献が相応である
- C：上記の段階に達していない

<留意点>

1. 優れた研究業績を基に、組織としての研究水準を評価するのであって、研究者個人を評価するものではないので、中期目標期間中に当該学部・研究科等において実施された研究業績であれば、既に異動して在籍していない教員の業績でも、当該学部・研究科等の業績として選定できる。
2. 1人の教員の研究業績を複数選定しても構わない
3. 共著論文のように、1つの研究業績に複数の教員が関わっていても差し支えない。
なお、関わっている教員が複数の組織にまたがる場合には、それぞれの組織における業績として扱って差し支えない。
4. 特任教授、客員教授の業績も選定できる。
5. SS、Sの判定基準は、分野ごとに多種多様であり、分野に応じて個別に判定基準を設けることは困難である。各学部・研究科等では、第三者による評価結果等の根拠を基にSS、Sと判断された業績で、組織を代表する優れた研究業績を選定する。その際、ピア・レビューアを納得させるに足る十分な根拠がないようなものが選定されると、当該組織の研究活動に対する自己評価能力が問われることにもなりかねないので、組織の責任において慎重かつ厳正な選定を行う。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

<実績報告書作成要領 12頁より>

分析項目ごとに、「観点ごとの分析」の結果を総合した上で、目的に照らして、4段階（「期待される水準を大きく上回る」、「期待される水準を上回る」、「期待される水準にある」、「期待される水準を下回る」）の判断の中でもっとも適切と思われる段階を選択し、その判断理由を記述する。

<留意点>

目的や特徴等に照らして、どのような「関係者」を想定（各学部・研究科等が、それぞれの目的や特徴等によって自ら判断する）し、そして、その「関係者」のどのような「期待」に応えているかについて、的確に記載する。

質の向上度の判断

事例1 「.....」(分析項目__)

(質の向上があったと判断する取組)

.....
.....
.....

資料 - A (資料・データの名称、出典等)

資料・データの内容

事例2 「.....」(分析項目__)

(質の向上があったと判断する取組)

.....
.....資料 - (頁) に示すとおり.....
.....

事例3 「.....」(分析項目__)

(質の向上があったと判断する取組)

.....
.....
.....

資料 - B (資料・データの名称、出典等)

資料・データの内容

.....
.....

.....

質の向上度の判断

<実績報告書作成要領 12 頁より>

学部・研究科等の研究目的に照らして、水準の向上があったと判断する取組（改善・向上事例）を示し、その向上の程度を示すデータとともに、判断理由を簡潔に記述する。また、法人化以降、高い水準を維持していると判断する場合は、高い水準を維持していることを示す資料・データとともに、判断理由を記述する。

<留意点>

1. 現況調査表では、質の向上度についての段階判断は求められていないが、機構による評価では、記述する改善・向上事例について、「大きく改善、向上している 又は 高い質(水準)を維持している」、「相応に改善、向上している」、「改善、向上しているとは言えない」の段階判定が行われることを踏まえて、取組を示す必要がある。
2. 法人化以降、高い水準を維持していると判断する場合は、「(質の向上があったと判断する取組)」を「(高い質を維持していると判断する事例)」に置き換えて記述する。

受理番号

学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト(Ⅰ表)

法人名 学部・研究科等名

1. 学部・研究科等の目的に沿った研究業績の選定の判断基準(200字以内)

2. 選定した研究業績リスト

No	研究業績名	種目番号	研究業績の分析結果		重複して選定した研究業績		共同利用等
			学術的意義	社会、経済、文化的意義	業績番号(重点的に取り扱う領域)	業績番号(他の領域)	
1901							
1902							
1903							
1904							
1905							
1906							
1907							
1908							
1909							
1910							
1911							
1912							
1913							
1914							
1915							
1916							
1917							
1918							
1919							
1920							
1921							
1922							
1923							
1924							
1925							

学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト(表)

「学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト(表)」及び「研究業績説明書(表)」作成要領[実績報告書作成要領抜粋(P.32-39, 49, 50)]により、作成する

研究業績説明書(表)

「学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト(表)」及び「研究業績説明書(表)」作成要領[実績報告書作成要領抜粋(P.32-39, 49, 50)]により、作成する

<留意点>

1. 「研究業績説明書(表)」の「3」欄の「要旨」は、日本語で記述する。
2. 「研究業績説明書(表)」の「5」欄の「第三者による評価結果や客観的指標等」は、分野によって異なり、「学術面」「社会・経済・文化面」どちらの視点で判断するかによっても異なる。例として、以下のようなものが考えられる。

学術面(想定する関係者:関係する学界等)

- ア 当該分野で定評あるレフェリー制の学会誌・専門学術誌での記載
- イ 論文掲載時のレフェリーによる評価
- ウ 専門雑誌、新聞などでの書評・紹介・引用
- エ 研究史・学界動向論文等における言及、学術書等の文献目録における記載
- オ 掲載された専門雑誌の Impact Factor、論文の Citation Index
- カ 研究業績により得られた学会賞・学術賞・国際賞等
- キ 研究業績に関わる招待講演・基調講演を行った当該分野における内外の定評ある学会・国際会議等(学会・会議名、開催年を含む)

社会、経済、文化面

(想定する関係者:国際社会や地域、特定の産業分野等)

- ア 当該業績の利用・普及状況や地域、特定の産業分野での応用・活用状況、政策への具体的な反映状況
- イ それぞれの専門分野に関わる教科書・啓蒙書などの執筆の場合には、それらが権威ある書評などに取り上げられている、あるいは、長年にわたり広く利用され影響を与えているなどが考えられる。
- ウ パフォーマンスなどの場合には、当該分野について、権威ある批評家に取り上げて成果を高く評価しているなどが考えられる。

(注) 「社会、経済、文化への貢献」とは、研究業績の内容が社会、経済、文化面において具体的に役立てられていることを意味し、当該教員が社会的活動に参加していること(例えば、国や地方公共団体の審議会等に委員として参加していること)自体は根拠にはならない。

業績番号(学部・研究科等)	
業績番号(重点的に取り扱う領域)	
業績番号(他の領域)	

研究業績説明書(Ⅱ・Ⅳ表)

氏人名	学部・研究科等名	
重点的に取り扱う領域名		
共同利用・共同研究	分科名	科目番号

1. 研究業績(氏名、論文タイトル、雑誌名、巻、ページ、掲載年等)を記載してください。

2. 研究業績の該当区分を○で囲んでください。
 1) 論文 (a. 単著 b. 共著) (ア. 原著論文 イ. 邦訳 ウ. アイに該当せず)
 2) 著書 (a. 単著 b. 共著)
 3) 創作活動に基づく業績
 4) 特許
 5) その他

3. 要旨を記述してください。(200字以内)

4. 研究業績の該当する事項を選択してください。(下記4つの枠のうち一つに○を記入してください。)

1) 学術的意義	2) 社会、経済、文化的意義
SS: 当該分野において、卓越した水準にある	SS: 社会、経済、文化への貢献が卓越している
S: 当該分野において、優秀な水準にある	S: 社会、経済、文化への貢献が優れている

5. 上記4において「SS」又は「S」と判断した理由を第三者による評価結果や客観的指標等の根拠を示しつつ説明してください。(500字以内)